

千葉大医学部付属病院の元副院長・高林克己さん(66)は、三和病院(松戸市)で内科医として勤務する傍ら、人生の最終盤で、どのような医療を選択するのが最良なのかを問いかける講演を県内各地で行っている。

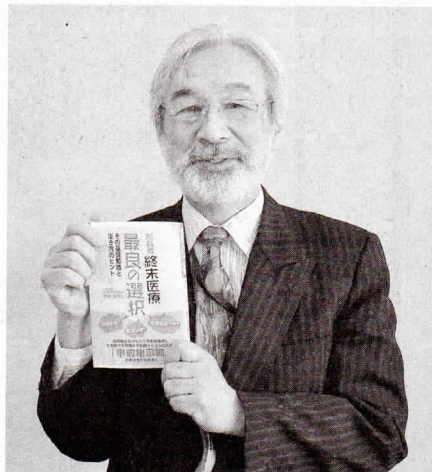
(渡辺光彦)

延命治療「指示書」残して

十字路

高林さんは同大卒業後、主に膠原病の専門医として活躍したが、1999年に転機が訪れた。赴任した東松戸病院(松戸市)は訪問診療に先進的に取り組んでおり、自らも患者宅へ出かけるようになった。初めは戸惑いもあったが、自宅で最期を迎えた患者を、親族たちが抱き合って涙を流しながら見送る様子を目の当たりにし、「在宅での看取りが人間の本来の姿かもしれない」と感じた。

より自分らしく最期を迎えるためには、意識がはっきりしているうちに、終末期の延命治療の方針などを「事前指示書」に書き残しておくことが重要だと知った。85歳だった義父に、自



「依頼があれば、どんどん講演に駆けつけたい」と話す高林さん

各地で終末期問いかける講演

内科医 高林 ^{かつひこ} 克己 さん

作の指示書を恐る恐る手渡すと、喜んで記入してくれた。義父は脳梗塞で89歳で亡くなったが、担当医師は指示書を見て、義父が望まないつらい延命治療はしなかったという。

約10年後には団塊の世代が後期高齢者(75歳以上)になり、希望しても病院に入れなくなる恐れがある。終末期をどう迎えるのか、医者としての体験を基に公民館などで講演を重ね、その内容をまとめた「高齢者終末医療 最良の選択」(扶桑社)も出版した。

高林さんは「長生きできた高齢者が最期まで尊厳のある生き方ができるようにあれば」と、依頼があれば積極的に講演に出かけるつもりだ。問い合わせは三和病院(047・712・0202)へ。